

茶道への思い

國學院大學久我山中学校3年（東京都）

十河 夏乃

私は小学校4年生の頃から、「何だかかっこいい」という気持ちでクラブ活動で茶道を選んだ。その流れで他にやりたいことも無かったので、中学でも茶道部に入ることにした。周りよりも経験年数が高い私は、少しい気になっていた。

しかし、中学で正式に部員になった後の一番初めのお稽古の日。茶室に入ると、入部体験の時は気にしていなかった先輩方のお稽古の様子に目を奪われた。小学校の頃は使っていなかった柄杓、釜、更好棚など、初めて茶道というものを見た時のような高揚感に包まれた。先輩方の流れるような動きに見とれていても、お稽古の説明は進んでいく。自惚れていた自分を恥じて、「今やっているお稽古を完璧にしなければ」と思い直した。普段質問することを躊躇する私だったが、もっと上達するために細かい動きや不確かな所は1つ1つ質問した。

中学2年の夏休み、私は祖母のご友人にお抹茶を振る舞うよう頼まれた。といっても硬い感じではなく、お点前というよりはお抹茶を点てるだけだった。しかし静かな空間で人にお抹茶を点てる、というのはやはり緊張する。コロナ禍の部活では自分で点てたお抹茶しか飲んでこなかったので、それもあっただろう。どうにか点て終えたお抹茶は、普段より出来の悪いものだったように思える。その後祖母とご友人と話し、もう一度点てることになった。その時には大分肩の力が抜けて満足いくお抹茶を点てることが出来た。茶道は共通のコミュニケーション手段であり、世代を超えて親交を深められる素晴らしい日本の伝統だと思う。

中学の茶道部に入って3年目の今でも、部活終わりに友達と曖昧な動きを確認し合うと、思っていた動きと違うことがある。お互いに自信の無い作法を確認し合う部活後の帰り道の時間が上品な気がして、またそれが部活後のルーティンになっていることが、言葉には言い表せない素敵な事のように思えてくる。週に一度のお稽古、普段はあまり話さない友達との帰り道、貴重で「今」この時間が好きだと思えることに幸せを感じる。